

カント目的論のコンテクストとしてのバウムガルテン「自然神学」の検討

著者	檜垣 良成
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158797

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01984

研究課題名(和文) カント目的論のコンテクストとしてのバウムガルテン「自然神学」の検討

研究課題名(英文) An Examination of Baumgarten's Natural Theology as a Context of Kant's Teleology

研究代表者

檜垣 良成 (HIGAKI, Yoshishige)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10289283

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテンの『形而上学』(1739 Halle. 4. Auflage, 1757)における「自然神学」を検討した。その成果として、「神の知性」および「神の意志」についてのバウムガルテンの理論は、近代の「理性主義」の基本的立場との脈絡においてより明瞭に理解されうることが判明した。また、カントの「知性的直観」という概念がもつ真の意味も、バウムガルテン『形而上学』における「神の知」についての考え方との対比において明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：I examined Alexander Gottlieb Baumgarten's "natural theology" in his "Metaphysica" (1739 Halle. 4. Auflage, 1757). The result of the examination was that Baumgarten's theory about "the intellect of God" and "the will of God" can be understood more clearly in the connection with the fundamental principles of modern "rationalism". The true meaning of Kant's concept "intellectual intuition" was also discovered in contrast with Baumgarten's concept "the knowledge of God" in his Metaphysica.

研究分野：人文学

キーワード：哲学 思想史 バウムガルテン カント 自然神学

1. 研究開始当初の背景

18世紀ドイツの哲学者アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテンと言えば、美学の創始者として有名であり、彼の『感性論(美学)』(Aesthetica)を中心とした研究は相当数あるが、彼の『形而上学』は、ヴォルフ哲学の焼き直しにすぎないと見なされ、それ自体ではあまり注目されることがなく、特に「自然神学」については、研究は手薄である。

研究代表者は、ヴォルフ主義哲学との対決という視点からカントの理論哲学を再検討して成果を挙げてきたが、今回は、自然神学に関して、ヴォルフ主義の哲学者の中でも一番カントに身近であったバウムガルテンの「自然神学」を検討する。このことを通して、カント哲学のコンテクストをより明瞭にするためにである。

「機械論」としての理論哲学と「義務論」としての実践哲学の裏に隠れて看過されがちな「目的論」としてのカント哲学の特質を解明するためには、彼自身が、「目的論は、その探究のための解明の完成を神学以外には見いださない」(V 399)と言うように、「神学」的考察が欠かせない。バウムガルテンが「自然神学」を論じたテキストを踏まえることによって、カントの諸テキストを理解するための基盤となる手がかりが獲得されるはずである。

2. 研究の目的

カントは、1755年から1796年までの41年間に及ぶ教授活動の間、終始バウムガルテンの諸著作を講義のテキストとして用いた。もちろん、この事実が直ちに、カントがバウムガルテンの思想に与していたということの意味するわけではない。しかし、カントは、みずからの講義において、これらの書から対応的に「概念」を取り上げたので、バウムガルテンの「概念規定」と「証明」は、常に彼の目の前にあったわけである。したがって、賛成するにせよ、反対するにせよ、バウムガルテンに対するコンテクストの中でカントの思想形成がなされたことは確かであり、少なくとも用語法や立論形式についての影響は必至と言わねばならない。バウムガルテンの哲学は、カント哲学の形式面を理解する上での必要不可欠な前提である。それにもかかわらず、従来の内外の研究では、今回のテーマに関して、この前提に十分な注意が払われてこなかった。

以前の基盤研究(C)「カント哲学のコンテクストとしてのバウムガルテン「欲求能力」論の検討」(および博士論文での訳注)によって、バウムガルテンの『形而上学』を精確に

理解するための基礎研究は整っているため、それを十分に踏まえて、内外ともに顧みられることの少なかった彼の「自然神学」を、特にカント目的論を念頭に置いて検討する。それによって、和辻哲郎やルイス・ホワイト・ベックのような「神学」的考察を軽視した研究者たちが看過したコンテクストが判明し、カント「神学」ならぬカント「哲学」を理解する上での「神学」的考察の不可欠性ととも、カント目的論の解釈の基盤となる貴重な手がかりが獲得されるはずである。

カントの目的論を理解するための重要なコンテクストが見いだされるのは、バウムガルテン『形而上学』の第800節から第1000節までをなす「自然神学」の中でも、特に「神の意志」と「神の行為」についての部分であるが、まずは、そもそも「自然神学」とは何か、そして、「神の知性」とはどのようなものかを確認する。その上で、「神の意志」について、「慈悲」と「正義」に注目しながら検討する。

3. 研究の方法

(1)アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテン(Alexander Gottlieb Baumgarten)の『形而上学』(Metaphysica, Halle 1739. 2.Auflage, 1743. 3.Auflage, 1750. 4.Auflage, 1757 (In: Kant's gesammelte Schriften, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften Bd.). 5.Auflage, 1763. 6.Auflage, 1768. 7.Auflage, 1779 (Reprint: Hildesheim 1973).)第4部「自然神学」(theologia naturalis)についてのテキストを検討する。

(2)以上のテキストを検討するにあたっては、バウムガルテンの後継者のゲオルグ・フリードリッヒ・マイアー(Georg Friedrich Meier)が1766年に出版し、カントの『純粹理性の批判』出版直後の1783年にはヨハン・アウグスト・エーベルハルト(Johann August Eberhard)が注釈を付けて復刻した独訳版『バウムガルテンの形而上学』(Alexander Gottlieb Baumgartens Metaphysik, Neue vermehrte Auflage, Halle 1783)と、これに先だって1755年から1759年にかけて出版されたマイアー自身の手になる4巻本で1800頁を超す大著『形而上学』(Metaphysik, Halle 1755-1759)等を参考にして、正確な理解になるように努める。

(3)また、カント全集のテキストデータベースを用いて、バウムガルテンの各概念に対応するカントのテキストを抽出して整理し、比較対照する。

4. 研究成果

(1)バウムガルテン『形而上学』(第4版)第4部「自然神学」(Theologia Naturalis)を検討する前に、まず神学の理解にとって最も重要な前提となる第1部「有論」(Ontologia)第1章のテキストを徹底的に再検討して、形而上学の基本概念の理解を確かなものにした。その際、後継者ゲオルグ・フリードリヒ・マイアの独訳や詳細な解説書に加えて、近年公刊された Günter Gawlick と Lothar Kreimendahl による全パラグラフの羅独対訳版 (*Metaphysica*, übersetzt, eingeleitet und herausgegeben von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl, Stuttgart-Bad Cannstatt 2011) および Courtney D. Fugate と John Hymers による豊富な資料付きの批判的英訳 (*Metaphysics, A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*, translated and edited with an Introduction by Courtney D. Fugate and John Hymers, London, New York 2013) をも参照し、訳注を作成して活字化した。

(2) バウムガルテンの『形而上学』において頂点に達した近世理性主義であるが、その特徴は概念 (ratio) が実在 (res) を吸収する点にある。この吸収を象徴するのが、彼の *realitas* 概念である。

ratio に対する *res* の性格を表わした *realis* という形容詞の意味は、近世の理性主義哲学においては、その理性主義 (Rationalismus) 的な立場故に或る変質を被る。このことを、デカルトの有名な明晰判明の規則のパーエーションに見ることができる。彼によれば、単に「言葉」によって「実在的」であることが帰結したとしても、そのことが「実際 (revera) にそうである」ことは確かではない。「単にそう考えざるをえないだけ」である可能性がある。しかし、「明晰判明に知覚される」ことは「真」であり、「実在的」(実際のこと) である。ここに、「いかにあるか」というあり方を意味するはずの実在性が「何であるか」という事象内容 (ただし、「真の」事象内容) に還元される事態が生じている。

バウムガルテンの『形而上学』においては、「真に積極的 [positivus] で肯定的 [affirmativus] な規定」が *realitas* と呼ばれる (cf. § 36)。この用法は、カント批判哲学の質のカテゴリーへ継承されるものであるが、*realitas* を「肯定性」へと還元するという、理性主義的思考の或る種の頂点を示すものである。しかし、ここで注意されるべきことは、この *realitas* は単に「何であるか」

を意味するだけでなく、デカルトと似た仕方、「真の」肯定とは、「名」や「見かけの概念」上での肯定のことではなく、「実際の」肯定であるという仕方、名詞的使用の *realitas* に「いかにあるか」の *realitas* をも含意させていたということである。

「仮象」に対する「真実」が「実際のこと」を意味することに即して、理性主義の哲学では、「論理的な真実」と「実在的な真実」とが区別されず、「真なる概念」と「実在」とが重なって、「実在」すなわち *res* は、「論理」ないし「概念」すなわち *ratio* に吸収されたのである。こうなっても、「名」ないし「見かけの概念」と、「真の概念」すなわち「実在」との区別が可能なので、「唯名的」と「実在的」との区別は有効であり、「名に惑わされる誤謬」論さえ健全であれば、「実在的」なものとはそうでないものとは充分区別される。実際、ライプニッツの「実在的定義」に対置されるものは「唯名的定義」であって「論理的定義」ではない。バウムガルテンの「実在的対立」と同様、「いかにあるか」の「実在的」が「論理的」に処理されてしまうため、*res* と *ratio* (*logos*) との対立は主題になることができず、*realis* ということは、*ratio* に対するというよりも、むしろ *nomen* に対する真なる *ratio* の性格として特徴づけられるようになったのである。

以上で明白になったことは、中世のトマスにおいては *ratio* に対する *res* の性格を示すものであった「いかにあるか」を表現する *realis* は、*ratio* (理性、概念、論理) によって *res* がいわば吸収合併されてしまう近世の Rationalismus (理性主義) の哲学においては、基本的に主題とならず、「何であるか」を意味する *realis* に還元されていたということである。Rationalismus という特有の哲学的立場が、「いかにあるか」を表現する *realitas* という言葉の台頭を押さえていたと言ってもよいであろう。

以上のように、バウムガルテンの『形而上学』において頂点に達した近世理性主義の *realitas* 概念は、若きカントに引き継がれた後、批判哲学において抜本的変革を被り、相互に還元不可能な二義性をもつことになる。この経緯を総括的に考察して論文に取りまとめ、中世からカントに至る哲学史の中にバウムガルテンの世界観を浮き彫りにした。

(3)バウムガルテンにおいて「自然神学」とはいかなるものであるかを、『形而上学』の先行するテキストを踏まえて明らかにして、その部分のテキストの本邦初訳を活字化した。

「自然神学」とは、信仰なしに認識されるかぎりにおける神についての学である (cf.

§ 800)。 「最も完全な有」(ens perfectissimum)とは、それに諸々の有における最高の完全性があるところのものである(cf. § 803)。最も完全な有は、実在的な有である。それゆえ、それには、有においてありうるだけ大きな実在性(realitas)が適合する。最も完全な有は、そのうちに最多最大の実在性があるところの「最も実在的な有」(ens realissimum)であり、「最高のよいもの」(summum bonum)であり、「形而上学的に最もよいもの」(optimum metaphysice)である(cf. § 806)。

あらゆる実在性は真に積極的なものであり、いかなる否定性も実在性ではない。それゆえ、あらゆる実在性が最大度に有において結合されているとしても、決してそれらから矛盾は生じない。それゆえ、あらゆる実在性は有において共可能である。ところで、最も完全な有は諸々の有の中で最も実在的なものである。それゆえ、最も完全な有には実在性の、しかも何らかの有においてありうる最大の実在性の総体が適合する(cf. § 807)。

「最も完全な有」としての「神」の概念が、バウムガルテンにおいては、そのうちに最多最大の実在性があるところの「最も実在的な有」であるということの意味を、「否定性」(negatio)や「存在」(exsistentia)そして「必然的な有」(ens necessarium)の概念にも注意しながら検討した。その際、神の「聖性」(sanctitas)や「全能」(omnipotentia)についても明らかになった。

「聖性」とは、それによって有の真にそのような複数の不完全性が廃棄される場所の有の実在性である。したがって、「最も聖なるもの」とは、その実在性によってそのあらゆる不完全性が廃棄される場所のものである。ところで、神における最大の実在性の総体によって、神におけるあらゆる不完全性が廃棄される。それゆえ、神は最も聖なるものである(cf. § 828)。

神においては、何故に彼の諸完全性は彼の内に存在するのかの充足的根拠がある。それゆえ、狭義の力がある。したがって、神は実体である(cf. § 830)。

神は最大の力をもつ。それゆえ、最多最大の附帯性を現実化するのに充足的な力をもつ(cf. § 831)。

諸々の附帯性はみずからの実体のそとでは存在しない。それゆえ、最多最大の附帯性を現実化するのに充足的な力は、最多の実体を現実化するのに充足的である。それゆえ、あらゆるものを現実化するのに充足的である。或るものを現実化するのに充足的な力は「能力」(potentia)である。したがって、「全能」とは、あらゆるものを現実化するのに充足的な力である。神は全能なものである(cf.

§ 832)。

(4)自然神学の議論をより正確に理解するために『形而上学』第1部「有論」第2章第1 - 3節のテキストも再検討し、「必然的なものと偶然的なもの」、「可変的なものと不可変的なもの」および「実在的なものと否定的なもの」についての理解を深めた。その際、マイアーの独訳や詳細な解説書に加えて、Günter GawlickとLothar Kreimendahlによる全パラグラフの羅独対訳版、およびCourtney D. FugateとJohn Hymersによる豊富な資料付きの批判的英訳をも参照し、訳注を作成して活字化した。

「必然的な有」や「実在的な有」のあり方についての省察は、神の概念の理解のためにも極めて有用であった。

(5)「神の意志」の前提となる「神の知性」のあり方についても考察を深めた。「知性」とは「判明な認識」の能力であるが、「判明な認識」が一つの「実在性」であることに注目して、「最も実在的な有」である神に最高の知性を帰するところにバウムガルテンの特徴がある。神の「全知」(omniscientia)を、「直観」、「最高の理性」、「知恵」(sapientia)、「思慮」(prudential)といった側面から明らかにして、その部分のテキストの本邦初訳を活字化した。

神はあらゆるしるしづけられたもの(signatum)を最も判明に認識するのだから、あらゆるものの直観をもつ。また、あらゆるしるし、および世界における諸々の魂のあらゆる象徴的認識(cognitio symbolica)を認識する。それにもかかわらず、神において、諸々のしるしの知覚の方が、諸々のしるしづけられたものの知覚よりも大きいし小さいということは決してなく、両方の知覚は常に最大である(cf. § 871)。

神はあらゆる連結を最も判明にみずからに表象する。それゆえ、最高の理性をもつ。神の理性は、知性が最高であるかぎりでは最高である。したがって、不可変的であり、諸々の推理(ratiocinium)のあらゆる継起なしに、最多のもの最大の連結を洞察するものである(cf. § 872)。

知恵一般は目的の連結の洞察(perspicientia)であり、しかも知恵は特殊には諸々の目的の洞察であり、思慮(prudential)は諸々の手段(remedium)の洞察である。したがって、神はあらゆる知恵のあるものである。あらゆる知恵のあるものであるとわれわれが言うかぎりには、1)あらゆる目的、2)あらゆる手段、3)それらのあらゆる可能な連結を、4)あらゆる質、5)あらゆる量に関して、6)可能な最大の連結に

において、7) 最も確実に熱烈に洞察するものを、われわれは崇拜する (cf. § 882)。

(6) 「神の意志」に関して、これまでに検討してきた『形而上学』の先行するテキスト(「自然神学」全般および「神の知性」に関するテキスト)を踏まえて詳細に吟味し、その部分のテキストの本邦初訳を活字化した。「他者に対してよく行なおうとする意志規定」が「慈善」(bonitas)であるが、これがそれぞれの人格に対して釣り合いがとれているとき、「正義」(iustitia)がある。

慈善(恵み深さ)とは別のものに対してよく行なおうとする意志の規定である。善行(beneficium)とは慈善から生じた、別のものにとってより有用な活動である。最小の慈善とは、唯一の最小なものに対して、すなわち最小にふさわしいもの(dignum)に対して一なる最小のよいものに向ける意志の最小の性向ないし態勢であるだろう。それゆえ、よりよくより多くのより大きな善行を、より多くのよりふさわしい者どもへと向けることを慈善が欲求すればするほど、慈善はより大きい。善行はより大きなよいものである(cf. § 903)。

諸々のペルソナないし精神に対して比例的な慈善は正義である。最小の正義は、最小に明晰で、最小に確実に、最小に生きた最小の数学的な認識に後続する最小の慈善であるだろう。それゆえ、1) より内包的に、2) より多くの、3) より大きな善行を、4) より多くの者に対して、認識された精神における完全性または不完全性の度に従って向けることを愛すれば愛するほど、5) より明晰に、6) より確実に、7) より熱烈に、その度が認識されていればいるほど、正義はより大きい。神は最高に正しい(iustus)。神を最も正しいと言うかぎり、各々すべての精神において出会う完全性または不完全性の度の、最も判明で、不可謬で、最大度に生きた認識に従って、最多最大の善行を最多の者に向ける準備が最もある、最も比例的な、神の最高の慈善を私たちは崇拜する (cf. § 906)。

(7) これまでの研究で理解を深めてきたバウムガルテンにおける神の知性と意志のありかたを、本研究の最終目的であるカント哲学のより深い理解に役立てるために、「知性的直観」に的を絞ってカントの思想と比較対象し、その成果を日本カント協会大会で発表し、さらに論文にまとめた。

可能的なもの現実的なものとの実在的区別は、哲学史上ではアリストテレスによる運動・生成の実在性の擁護に際して導入された重要概念である。パルメニデスやプラトンが真に「ある」もの、実在的に「ある」もの

を現実的に「ある」ものに一元化したために運動や変化に実在性を認めることができなかったという問題を解決したのが、デュナミスの実在性の思想である。

ところで、カントは「知性的直観」のもとで「それによって直観の客観の現存在さえも与えられるような直観様式」(B72)を理解している。なぜ客観が直観されるや否やそれが現存在するのかは、直ちには理解困難である。というのも、直観というものは通常、「認識」であり、認識というものは、その対象やその対象の存在とは区別されるべきものだからである。その上、伝統的には、神の直観的知性の対象も単に可能的なあらゆる世界においてありうると思われている。現実世界とは別に可能世界というものが想定されてきたのである。もしそうでないとするなら、神の意志を神の知性から区別する必要がなくなってしまうからである。

実際、バウムガルテンも、『形而上学』の「自然神学」において、神の知を「単純な知解の知」、「自由な知」および「中間知」に区分し、単に可能なものの知と現実的なものの知を区別しているのである (cf. § 874-876)。この区分をカントは『ペーリツの哲学的宗教論講義』で批判する。

「神に関しては可能的なものと現実的なものとの間にはいかなる区別もない。というのは、可能的なものの完全な認識は同時に現実的なものの認識だからである。……単純な知解の知と自由な知との間の区別が生じるのは、神の認識についての私たちの人間的表象においてだけであり、神の認識そのものにおいては生じないのである (XXVIII 1053f.)」

批判期のカントは、確かに、理性主義者や若き頃の自分自身の「可能性」概念を批判して、それは単なる「論理的可能性」にすぎなかったということを実感している。この点において可能性における実在的なものを意識している。しかし、そこで見いだされた「物の可能性」すなわち「実在的可能性」は、それが「現実性」と区別されているかぎりにおいては、「物そのものにおいて」あるものではなく、単に人間の「知性」にとっての対象にすぎないのである。『判断力の批判』第76節「注」でも言われる。

「物の可能性と現実性とを区別することは、人間の知性には不可避免的に必然的である。……この区別が諸物そのものにおいて存するという事実を証明するという事はない」(V 401f.)

ここで知性的直観の対象の存在の問題も解決する。

「もしも私たちの知性が直観的であるとしたら、知性は現実的なもの以外のいかなる対象ももたないことであろう。概念(単に

対象の可能性にかかわるにすぎないところの)および感性的直観(私たちに或るものを与えるが、やはりそのことによってその或るものを対象として認識せしめはしないところの)は両者とも消え失せることであろう」(V 402)。

「直観的知性」にとって「可能的な物」はありえない。「物の可能性」を成り立たしめているのは、あくまでも人間の「diskursivな知性」、ないしは、そのように有限な「抽象的概念」(と「感性的直観の形式」)であって、「可能性」と「現実性」との「実在的」区別の根拠は、「主観とそれの諸認識能力の本性のうちに存する」(V 401)のである。

非依存的な神に「感性」のような受容性はありえない。狭義の「概念」(Begriff)というものは、それが抽象的なものであるかぎりにおいて、人間固有のものである。神の知性が直観的であるとするなら、それは直接的に認識するのであるから、物の原像(Urbild)としてのIdeeが神のうちにはあるのである(Vgl. XXVIII 308f., 1053, 1058f.)。

カントは確かに理性主義に抗して「可能性」と「現実性」との間の真の「実在的」区別を取り戻したが、それは「あるがままの世界」においてではなく、「私たちに現象する世界」においてであり、あくまでも人間の理性の側から、ratioとresとの区別を取り戻したことによると言ってもよいであろう。だからこそ、「客観的実在性」は、「表象」や「概念」の側からの「対象への関係」となるのである。

ここには、アリストテレスやトマススの形而上学に対するきわめて根本的な批判が見いだされうる。彼らは「運動」の「実在性」を救うために「物そのものにおいて」「可能なres」を想定した。しかし、批判期のカントからすれば、これは人間の認識にとっての特殊事情を「物のあり方」へ押しつけた世界観であって、「物自体そのもの」の真の姿を捉えたものではない(この点に関するかぎり、カントはむしろパルメニデスやプラトン、あるいは、スピノザに近いのかもしれない)。「可能的なもの」と「現実的なもの」を「実在的」に区別することは確かに必然的である。しかし、それは人間の認識のあり方としてそのようなのである。「実在性」が「概念」内部で処理されうるようなrationalな認識論からは脱皮したカント批判哲学であるが、アリストテレスやトマススのような超越的視点に立ち帰ったわけではなく、その哲学はあくまでも「超越論哲学」の名にふさわしいものだということが確認されるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

1. 檜垣良成、カントにおける可能性と現実性の実在的区別 神の直観的知性の問題、『哲学・思想論集』(筑波大学人文社会科学研究所哲学・思想専攻) 査読有、第43号、2018年、23-38頁
2. 石田隆太、檜垣良成、バウムガルテン『形而上学』第4部「自然神学」第1章「神の概念」第3節「神の意志」試訳、『筑波哲学』 査読無、第26号、2018年、108-122頁
3. 栗原拓也、石田隆太、檜垣良成、バウムガルテン『形而上学』訳注 第1部「有論」第2章第1-3節、『筑波哲学』 査読無、第26号、2018年、83-107頁
4. 石田隆太、檜垣良成、バウムガルテン『形而上学』第4部「自然神学」第1章「神の概念」第2節「神の知性」試訳、『筑波哲学』 査読無、第25号、2017年、72-82頁
5. 檜垣良成、石田隆太、バウムガルテンの「神」概念 『形而上学』第4部「自然神学」第1章「神の概念」第1節「神の存在」試訳、『哲学・思想論集』(筑波大学人文社会科学研究所哲学・思想専攻) 査読有、第42号、2017年、19-31頁
6. 檜垣良成、石田隆太、栗原拓也、バウムガルテン『形而上学』訳注 第1部「有論」第1章(改訳増補版)、『哲学・思想論集』(筑波大学人文社会科学研究所哲学・思想専攻) 査読有、第41号、2016年、43-78頁
7. 檜垣良成、Realitätの二義性 中世から近世へと至る哲学史の一断面、『近世哲学研究』 査読有、第19号、2015年、1-34頁

[学会発表](計1件)

1. 檜垣良成、カントにおける知的直観の対象の存在 可能性と現実性の区別、日本カント協会第42回学会、2018年11月11日、明治大学中野キャンパス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

檜垣 良成 (HIGAKI, Yoshishige)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：10289283